「かわいそうな　ぞう」を読んで

アサンプション国際小学校　三年　天野　利輝

どうぶつえんのひとは、いしのおはかを、いつまでもなでていました。せんそうの時にしんでしまったぞうのことを作者に話すシーン。

ぼくも、ぼくのひいおじいちゃんの名前がこく印された石ひを見に行った時、かわいそうと思わず言いながら名前の石ひを何回もなでていた。ぼくのひいおじいちゃんは、せんそうがおわる一日前に大阪大空しゅうにあい二十七さいで、亡くなった。ぼくのおじいちゃんが、ひいおばあちゃんのおなかの中にいる時。ぼくのおじいちゃんに会いたかっただろうなと思うとかわいそうだ。でも、九才のぼくのおたん生日、大阪に遊びに行った時、「ピース大阪」に通りかかった。ひいおじいちゃんの名前がこの「刻（とき）の庭」に刻まれている。きっと元気にがんばっている、ぼくやぼくのおじいちゃん、家族に会いたがっていたのかな。そう思うと、ひいおじいちゃんの分まで元気にがんばりたい。

うえのどうぶつえんのひとたちは、えさも水さえも食べさせてあげられなかったぞうが、やせこけたはなをたかくのばして、ばんざいのげいとうをしたまましんでしまってかわいそうとなきふせた。

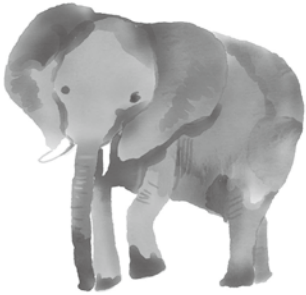
読んでいて、ぼくが考えたことがある。せんそうは、かわいそうに思うことだけでは、足りない。かなしいことをこわがらず、ちゃんとその時のことを知りたいと思った。だからおじいちゃんに、ひいおじいちゃんがどんな人だったか知りたいからと伝えた。するとせんそうのテレビのチャンネルをかえたり、せんそうの話しをしたがらないおじいちゃんが、ひいおじいちゃんの話をしてくれた。かごしまけんから大阪に、はたらきに来ていてひいおばあちゃんは、かごしまけんにそ開していた。ひいおばあちゃんは、毎年大阪造へい局のさくらの通りぬけに行っていた。ひいおじいちゃんが、亡くなった大事な場所だから。おとなしくてまじ目でやさしかったみたい。しゃしんを見たら男前だった。ぼくだって会ってみたかった。

「せんそうは、にくたらしい。」

おじいちゃんは、今もそう言っている。それなのにぼくには、せんそうの時のひいおじいちゃんの話をしてくれた。ぼくがひいおじいちゃんの名前をなでていたように、

おじいちゃんは、形見の手ちょうを大事になでながら話してくれた。

うえのどうぶつえんのぞうたちも、ぼくのひいおじいちゃんも、せんそうで亡くなった人たちは、みんなかわいそうだけじゃなく、くやしかったね。つらかったね。こわかったね。と思ってほしいんじゃないかな。

だからこそ、せんそうのことやせんそうでつらい人の気もちを知っていきたい。そして、ご先ぞさま、家族、先生、友だちのことを大切にしたい。もちろん元気なぼくの事も。

「かわいそうなぞう」
文　土家　由岐雄
絵　武部　本一郎
金の星社